寄せ太鼓

北九州市立長崎街道木屋瀬宿記念館
運営協議会 広報部会
北九州市八幡西区木屋瀬三丁目16番26号(〒807-1261)
TEL 093-619-1149
FAX 093-617-4949

熱い思いを人形に込めて
勇壮・盛大に祇園祭り

須賀神社に祇園社が創建されて以来五百七十年近い歴史を誇る木屋瀬祇園は、平成二十六年度は七月十二日、十三日に執行されます。

祇園祭りは毎年五月段階に実行委員会が立ち上げられ綿密な打合せの元、準備が進められます。

そして、祭りの運営費用は各町の負担金や住民の寄付金など浄財によって賄われます。

輪番制となっている当番町については本年は青山笠が芝原、赤山笠が新地町となっています。青山の今川雪雄聡取締役、赤山の伊藤淳一聡取締役を始めとする当番町の山笠関係者は会議や打合せなど着々と準備をすすめています。

祭りの核となる山車については、山笠会館運営委員会のメンバーを中心に製作がすすめられています。

本年もその人形作りについては一定の構想にもとずきすすめられており祭り本番での人形公開が楽しみです。この人形作りに若い人達の木屋瀬の伝統行事に注ぐ熱い思いがこめられており、その完成が待たれるところです。暑い盛りの七月十二、十三日の祭りは、お汐い取り、両山の事務所開き、山笠の巡行、山笠の奉納、宵山笠、追い山、宮入りと一連の流れの中で執り行なわれていきますが、木屋瀬の歴史と伝統を踏まえ盛大かつ勇壮に実施されるでしょう。

この祇園祭りについては、近年高齢化の進んだことや各町の人的、経済的な問題など、その運営のあり方が問われるいろいろな意見もあり、今後総代会を中心に慎重な検討が進められていくものと思われます。

木屋瀬宿記念館運営協議会
広報部会長　徳永　興紀

総合問い合わせ先
長崎街道
木屋瀬宿記念館
☎ 093 619・1149

夏休みイベントのご案内

昨年の七夕祭りの様子

木屋頼宿記念館では、毎年恒例のたなばたまつりを8月9日(土)に開催する予定です。笑顔の宅配便人形ボードヴィル・ドラや楽しい催し物を予定しておりますので、ぜひお越し下さい！

学芸員　髙田　佳奈

ご挨拶

こやのせ座運営協議会　理事長　山田　靖

理事長職を拝命し早や一年が経過しました。理事の皆様や部会の方々、記念館職員のご協力により、なんとか努めることができました。感謝いたします。記念館の運営につき、地元の方より御意見を頂いています。こやのせ座の有効活用や史料館の催時等幅広い要望にお応えしてまいる所存です。各団体の協議会理事へ忌憚のない意見をお寄せ下さい。地元の方に愛され親しまれる記念館運営に心掛けたいと存じます。宜しくお願い致します。

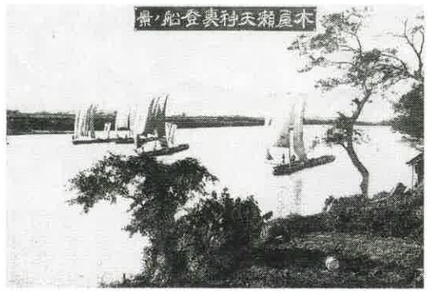
木屋瀬宿の川艜文書
① 遠賀川の川艜と船頭

木屋瀬みちの郷土史料保存会　松尾　良美

福岡藩に仕えた貝原益軒は儒学者・博物学者・庶民教育者として、「黒田家譜」や「筑前続風土記」を編述し、多くの著書を遺した業績は今日でも高く評価されている。

木屋瀬という地名の由来を彼は次のように記している。「聖光上人穂波郡明星寺ヲ再興スルキ、豊後国臼杵氏ヨリ材木ヲ寄附シケルヲ船ニ積ミ、蘆屋川ヨリ上セ、此地ニ木屋ヲ掛ケテ入置ケルヨリ木屋瀬ト云う由……」

私共が居住する木屋瀬は、遠賀川とは表裏一体であって、遠賀川は宿駅木屋瀬の栄朽盛衰の姿を幾百年間にわたって、つぶさに見守ってきているのである。勿論、明治維新になって遠賀川という名に統括されたが、それ以前は木屋瀬川・直方川・飯塚川と流域の地名で呼称されていた。藩政時代の遠賀川水運は、領内の年貢米の輸送が、川岸の要地に設けられた木屋瀬や植木等の各船場から堀川運河を経由し、響灘や洞海湾に面した港（芦屋・黒崎・若松）に運ばれ、上方（京阪神）へ向う廻船（海上運送船）に積み替えられた。



江戸時代後半からは、筑豊地方で石炭の採掘が盛んになり全国で製塩や燃料に石炭の需要が増加したので、藩も専売制度の「仕組」を行い、藩の産物である石炭・生蝋（黄櫨の果実から採取）農産物を積んだ川艜の往来が頻繁となり遠賀川の水運が賑わった。

遠賀川は川床が高く、流れが極めて緩やかで、特に芦屋の河口は船の喫水が深い大型船の航行ができなかった。藩は度々洪水で氾濫する遠賀川の治水と遠賀平野の新田開発の為、実に百八十三年の歳月を費やして堀川開削工事の中止や再開を繰り返した。第一期工事から第四期工事で「寿命唐戸」完成迄が、宝暦七年の今より二百五十七年前であって、川艜が堀川水路を経て洞海湾へ通じた。

年貢米や石炭を運んだ川艜は、「川平駄」とも書き、その名の通り船底が浅く平たくなった船で、海で使われる船は波を乗り切って進むために、船の底が稍緩やかな三角形になっている。遠賀川は流れが緩慢で水深が浅いので、川の底に悶えないように、船底を浅く平たくしてある。更に、前と後の横幅を広くして、そのぶん荷物を多く積めるようにされ、その上に浅瀬を通る時、船体が「しなる」（弾力があって、しなやかにたわむ）ように設計されている。中型船の積載量七屯、小型船は積載量四・五屯、舟の長さ四米から約十四米程の川艜が、竿や櫂そして帆を張って川艜を進めていたのである。

川艜の往来が最盛期には、一日に二千艘に達し、明治末期の記録によると、木屋瀬の川艜業者が百四十六戸、船頭六百五十四人という数字が残っている。

明治に入ると川艜の積荷は殆ど石炭で、日清戦争を経て日露戦争頃が川艜による運送が全盛時代だったという、新聞の記事が残っている。戦後の昭和三十二年秋に西日本新聞が〝観光木屋瀬宿〟昔ばなしという表題で「川艜船頭座談会」が、生存されていた船頭さん達の回顧談を記事にしている。

「朝に木屋瀬の船場溜を出て一日、大潮にのると昼には若松に着くが、船が唐戸でツカえると帰って来る迄、一週間もかかった…」「寿命の唐戸から中間の唐戸を通り、吉田の河守神社まで下ると、橋の上に差し下した、テボ（竹籠）には通過料一金二銭を入れて通った…」等々の話が木屋瀬弁で語られた。

淡白で潔よさ〟板子一枚下は地獄だ〟と度胸と男気を張った船頭達なので、その当時は何かと喧嘩や揉め事のトラブルが多かったと思われる。

下記の古文書を掲げてみたい、表題が「鞍手郡木屋瀬村川艜船頭共仕上ル記請文之事」で年代は不詳である。

記請文という文言で、史料館内の二階入口の「追分道標」の前面の展示ケースの中に「商売神文之事」という表題の同じ記請文が展示してある。記請文とは辞書では、「守るべき事を記した前書と、これに違背すると神仏の冥罰を蒙る旨を記した神文」と述べてあった。「筑前木屋瀬宿飴組合」が列挙された箇条書に身持放埒ニ致間鋪事とか喧嘩口論屹度致間鋪事云々と記されている。以上の事により、飴屋記請文と川艜船頭記請文を較べながら調べた事柄を次回に記していきたい。

シリーズ 筑前木屋瀬宿 神仏めぐり

第三十一回 本宮神社（金剛田の口）

日本人の神への信仰は、山や森、風、雷など、萬物に霊魂や精霊が宿るとして畏怖し、それを崇め祀ったことから始まりました。その後、日本の国づくりの歴史書、「古事記」や「日本書記」に出てくる、神話の人物も神として崇められるようになりました。世界宗教のキリスト教やイスラム教は一神教ですが、日本の神は「八百万（やおよろず）の神々」という言葉があるように多くの神が存在します。

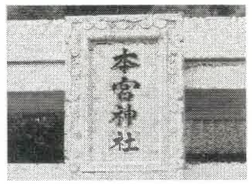
その神々が、降臨される場所は「聖」と「俗」との境界がある神域です。その神域に社（やしろ）を建てたわけです。社とは、神が降臨される場所を言います。

さて、木屋瀬町誌によると、本宮神社は金剛田ノ口にあり、祭神は日本武尊（やまとたけるのみこと）にして、永禄十二年（西暦一五六九年）9月勧請する。又伝説によると地方にて日本武尊を祀るのが最初であったので、本宮と称すとも記されています。

木屋瀬宿から、二百号線に出て八幡インターへの入り口の道から、サールナート葬儀場の前の道を山の方へ進み、高速道路の高架下を通ると右手に鳥居が見えます。住所表示は、八幡西区金剛四丁目八の十二番です。鳥居には、社額が掛かり石柱には、天保十三年建立、平成十二年に再建すると銘記してあります。鳥居を潜り石段を登ると、小高い丘の上に鬱蒼として木々に囲まれ、今にも神が降臨されるような「気」が満ちている空間に、本宮神社の神殿があります。その隣に、産守神社の社額が掛かったお宮があります。本宮神社の祭神は、日本武尊で、現存する日本最古の歴史書、古事記、日本書記に登場する神話の世界の伝説的英雄です。日本武尊は、景行天皇から朝廷に反目する熊襲（くまそ）一族の討伐を命ぜられ、女装して酒宴の席に紛れ込み、隙を見て剣で、族長のカワカミタケルを刺し退治しました。その熊襲退治の様子が、絵馬として木屋瀬宿の須賀神社に奉納されています。絵師は木屋瀬出身の日本画家、新谷啓造（鐵僊）です。日本武尊は大変強い神様で災害や外敵から守ってくれる神として、田ノ口地区の人々によって永い間祭られてきました。本宮神社では、今年も五月には「苗代籠り」、九月は、「秋祭」、又、正月の「歳旦祭」など、この地域の人々によって代々引き継がれて来ています。隣にある産守神社は、字のごとくお産の神様ですが、子供を産む、新しく生まれるということから、五穀豊穣の神としても崇められています。また、金剛という地名は、昔この地に金剛寺という大寺があつた事から、この地域を金剛というようになったと伝える地名辞典もあります。本宮神社は、永い年月、この地域の人々の願いや思いの中で、「産土神社」「守護神」として、祀られ、敬われて来ました。村民の強い絆と信仰が素晴らしい文化を今に残しています。

本宮神社 神殿

須賀神社 絵馬



代々の苗代籠り風わたる
祭り笛山懐の社かな

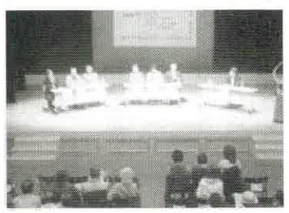
本町　野口靖彦

第13回 木屋瀬芸術祭

例年5月3、4、5日の連休に実施している芸術祭も今年で13回となりました。好天に恵まれ来湯者も多く活気ある催しとなりました。北九州のマイスターによる講演フォーラムには、次世代への技術・技能を伝承するための教育、育て方を中心に語って頂き、北九州市の教育委員会の方々も拝聴され、学校教育の場でも相通じる面が多々あったように感じました。

筑前六宿開通四〇〇年記念実行委員会（会長梅本静一氏）による、事業の経過報告では、「筑前六宿道中マップ」「筑前六宿案内本」の完成報告があり、本年度の目玉事業の計画、今年7月26日こやのせ座で開催の「筑前六宿子どもサミット」、9月から3回に分けて実施の「筑前六宿ウォーキング」が発表されました。芸術祭の大きな目的のひとつである「六宿間の連携を深める」が更に前進したと感じました。「歴史談義其の二」では黒田官兵衛の地として大いに盛り上がりました。

木屋瀬中学校による吹奏楽の演奏会、林家きく麿師匠による落語会、広湯ではハンギングバスケットの講習会、最終日には筑前各地の盆踊り8団体による連絡会議と盛りだくさんの芸術祭になりました。ご協力頂いた皆様に心より感謝申し上げます。



職員紹介

西岡副館長

4月1日から長崎街道木屋瀬宿記念館副館長に就任いたしました。初めてのことも多く、日々新鮮な感覚を味わっています。

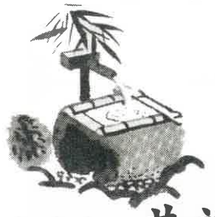
木屋瀬の伝統や文化を学びながら、木屋瀬の魅力を多くの方々に知っていただけるよう、記念館職員とともに努力していきたいと思っておりますので、ご指導のほどよろしくお願いいたします。

川筋の都木屋瀬

木屋瀬は宿駅として栄えた。豊臣秀吉は、外国に出兵計画をたて、九州の諸大名に命じ肥前唐津の名護屋に、本拠の城郭を建造させた。この城の周囲に諸国の殿様達も、各々の陣営を設けた。これが百ヶ所以上も出来、いよいよ全国の将兵を召集した。

大阪勢では先発隊として、文禄元年三月一日小西行長、加藤主計が、名護屋へ向かった。秀吉も、三月十六日に出発した。徳川家康も、名護屋の竹ノ丸に完成した、自己の陣営に向かって出発した。途中、香月町の石坂で、坂の急傾斜に交通整理が必要となった。その為の少しの暇を、上石坂の清水家に休憩している。文禄元年四月一日前後には名護屋へ向かう将兵が、九州の土を踏み旗差し物を押し立てて続々木屋瀬を通過している。その度毎に起るどよめきと雑踏と、勢い立つソワモノ共の意気を真向に迎えた緊張とが、町の中を駈け巡り、木屋瀬の人々を大きく躍動させた。やがて勇み立つ軍勢の熱気は爽やかな木屋瀬の風と共に去って行った。尚名護屋に三十数万が集り小西行長が二万、加藤清正が一万、黒田長政が一万を率い総勢二十一万の将兵が出征した。

江戸時代木屋瀬は宿場となった。宿場では大名の宿舎を本陣と呼び、予備の宿舎を脇本陣と呼んだ。小説「夜明け前」の作者、島崎藤村の生家は木曽街道で本陣を勤めていた。東海道や中仙道では、こうした名家が多かったので、大方の本陣は名家で勤めていた。本陣を勤める名家がない宿場ではその地区の藩が、藩費で藩の公舎を造り本陣とした。木屋瀬を通っている長崎街道の、二十五宿の本陣は、藩の公舎の方が多いようである。



わたしの昔話

木屋瀬宿

宿場本通りの南の入口感田町には、現在も構口と従是標があり、北の入口新地町の方は石段を上り構口となっていた、と言われているが今は跡形もない。

町の中の本通りから東へ西へと分岐した横町はすべて、お宮やお寺にて遮閉され通り抜ける事が出来ない袋小路であった。本陣と脇本陣は本町に在った。本陣は塀に囲まれていて、大小の門が七門あったと言われ瓦には黒田侯の紋が入っていた。

この中の一門が、現在永願寺に保存されていて本陣を忍ばせる貴重な門である。本陣跡には大名井戸と呼ばれる大井戸が残るだけであり、新町の代官小路奥の代官屋敷も目立たない石垣が残っているだけである。道路は本陣があった本町だけは、特に道幅が広く、殿様の送迎の度毎に、盛り砂又は撒き砂と言った定まりで、遠賀川の砂を町中に撒いていたので、美しい路面であった。

本陣の前の特に八軒家と呼ばれていた、八戸以外の町の家々は、二階建土蔵造り格子戸と言った建前が多く、鋸の歯状に建てられ、整然と馬乗り形に並んでいた。構口以外より宿場への出入りが出来ない構成で、町全体が平面城郭のように整っていて堂々と落ち付いていた。こうした町の佇まいは旅から旅の多くの人々にほのかに厳しい物を感じさせたに違いないが、一時の憩いや、一夜の泊りが嬉しくなる、おおらかな安らぎが宿場には満ち溢れていた。

やね越えて
まちに蝶来る
日和かな

照る日も曇る日も旅姿の人々が静かに流れゆく綺麗な町であった。木屋瀬宿は博打場もなく、ならず者もいず、素晴らしい川筋の都であった。

本町　柴田由美子

柴田豊廣遺稿集より

前回企画展報告

第53回企画展「長崎街道　ひなまつり」（平成26年2月15日(土)～3月30日(日)）は、去年のひなまつりイベントに引き続き、石坂の立場茶屋銀杏屋と木屋頼のもやいの家、旧高崎家住宅（伊馬春部生家）、木屋瀬宿記念館の4施設連携で行いました。それぞれの施設で趣を変えて、古式の雛飾りやさげもん等の展示を致しました。期間中、一二二八名とたくさんの方に来館していただきました。

第54回企画展「ポジャギ展―伝統工芸品で魅せる手仕事の美しさ―」（平成26年4月26日(土)～5月31日(土)）も好評のうちに修了致しました。飯塚市のポジャギ工房「素花（そふぁ）」の方々にご協力いただきまして、韓国の伝統工芸品である「ポジャギ」や組紐の展示を行いました。また、関連イベントで行いましたポジャギと組紐のワークショップも多くの方がご参加くださり、素敵な作品を作られていました。企画展期間中は六九三名（5月30日現在）の方が来館してくださいました。誠にありがとうございました。